

保育者養成校において子育て交流会を開催する意義

著者	和田 幸子
雑誌名	京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究 紀要
号	56
ページ	45-53
発行年	2018-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000913/

保育者養成校において子育て交流会を開催する意義

和田 幸子

I. 実践の背景と目的

保育所保育のガイドラインともいえる保育所保育指針は1965（昭和40）年に施行されて以来、4回の改訂を重ねている。平成29年告示されたこの度の改訂では、「乳児保育」に関わる部分と、「子育て支援」に関わる部分に重要なポイントがある。「乳児保育」とは3歳未満児を念頭においた保育を指し、その発育、発達の過程において非認知的能力の果たす役割を明確にし、この時期の援助や関わりには特異性があることを明らかにしている。「子育て支援」については、前回までの保育所保育指針では「保護者に対する支援」としてあげられていたのだが、今回の改訂では第4章「子育て支援」としてあげて、地域社会全体で子育て支援をしていくという立場を明らかにしている¹⁾。今日の保育所保育に求められる資質を保育者養成教育においてどのように学修体験させていくのか、この改訂により保育者養成校では授業改革が迫られることになった。

保育者を目指す学生といえども、幼児に比べて乳児との関わりに戸惑いを感じる者は少なくない。学生からしばしば「乳児は反応がないからやりにくい」という発言を聞くことがあるのだが、乳児自身は外界のものを見て触ることによって、また他者からの関わりに対して感性が動いている。そこに寄り添い同じように感じることに意義を見いだしていくという、幼児との関わりとは質的に異なる価値観があり、求められる感性がある。また、子ども自身との関わりだけではなく、その家庭、地域社会をも含んだ子育て支援の実践を理論と共に学ぶ機会を保育者養成校は積極的に創り出し、そこに学生を参画させていく必要がある。つまり、親の見守りのもと遊ぶ子どもに寄り添い、乳児の表現を読み取り応えていくことを徐々に学び、「乳児保育」への抵抗を少なくすること、そして保護者も参加する保育の場で学生が子育て支援の実践を経験することが「子育て支援」の学修にとって重要となる。

本学では、学内で未就園の親子が集う光華こどもひ

ろばを開催している。学生は授業の一環として保育スタッフとして参加している。2016年度前期に初めての試みとして、光華こどもひろばに参加する親子を授業に招き、学生との子育て交流会を開催した。これによって学生は①家族の中の子どもという視点を学んだ②子ども理解を得た③子育ての過程で親も変えられていくことを知った④子育て支援の必要性に気づいた。そこで筆者はさらに有効的な学修とするために、授業から光華こどもひろばへの参加を経て子育て交流会を開催するというサイクルを1年次後期と2年次前期とで2回展開させる開催案を提示し^{注1)}、2016年入学生対象に2016年度後期と2017年度前期で2回開催した。

他校においても、学内で行う地域子育て支援に力を入れており、その実践研究も見られるようになってきた。古田は学内の子育て支援事業に学生が参加することによって子どもとの関わり方について自己課題を明らかにしたこと、事前準備/段取りの仕方について気づきがあったこと、発達段階についての知識の必要性、コミュニケーション力、イメージ力が必要であるという気づきをした、とまとめている²⁾。2016年には入江らによりテキスト『子ども・保護者・学生が共に育つ保育・子育て支援演習』が発刊され、その中に学内で行う子育て支援の活動について2校での授業との往還の実践経過と考察がまとめられている^{注2)}。これらは、授業の学修と子育て支援事業での保育参加の有効性について報告したものである。しかし、学生と保護者が交流するプログラムを積極的に取り入れた事例研究は見あたらない。

本稿では親子を授業に招いての子育て交流会開催を取り上げる。筆者がこの子育て交流会の開催に際し、モデルとしたのは、寺田清美による赤ちゃんとのふれあい授業である。これは小中高生と赤ちゃんとの交流授業を継続的に実施し、生徒が次世代育成への意識を高めることを目的としている。赤ちゃんを迎えるための事前準備、赤ちゃんと実際に遊ぶこと、お母さんへのインタビュー、赤ちゃんが喜ぶ活動や発達について学習することと考察を主な内容としている^{注3)}。筆者

は保育者養成校での子育て交流会開催に際し、これらの体験過程を盛り込めるようにした。

本稿の目的は、授業と光華こどもひろばとの連関と、親子を授業に招いての子育て交流会開催が保育者養成課程の学生の学修と子育て支援に有意義であることを提示することである。

Ⅱ. 方法

まず、光華こどもひろばと授業との連関を整理し、2回の子育て交流会の概要をまとめ、子育て交流会後にお礼カードに学生が記した内容、子育て交流会に参加した保護者に記述して頂いた感想シートから、学生、保護者にとっての子育て交流会の意義を考察する。なお、学生、当該の保護者には授業研究の一環として資料を使用することについて伝えた承を得ている。

Ⅲ. 子育て交流会の開催

1. 光華こどもひろばと授業の連関

本学の保育実習室において、未就園親子対象の光華こどもひろばを水曜 10:30-12:00 を基本として年間 20 回開催している。学科教員で協同的に運営がなされている。2016 年度後期は「乳児保育」(1 年次対象)を、2017 年度前期は「障害児保育」(2 年次対象)を連関科目として学科で定め、履修学生を 8~10 名ずつ順に参加させ、当該授業の中で事前準備したことを光華こどもひろばにおいて実践、当該授業の中で事後報告を行う、という方法で学生の参加を進めてきた。他ボランティアでの参加も含め、対象学生は 2 回以上、光華こどもひろばに参加したことになる。

2. 子育て交流会開催への手続き

(1) 1 回目の子育て交流会開催への手続き

2016 年入学生に向けての 1 回目の子育て交流会は、2016 年 11 月 14 日(月)1 講時「乳児保育 a」(受講生 32 人)、2 講時「乳児保育 b」(受講生 36 人)の授業中に設定した。その理由の第一は「乳児保育」の授業で乳児の発達と保育内容について一通り学修した時期であること、第二には履修生の光華こどもひろばへの参加を順次進めており、事前準備と事後報告を授業内で行っていることから、乳児期の子どもも理解と光華

こどもひろばでの保育についての学生の理解が一定進んでいる時期だと考えたからである。第三の理由として、親子で授業に来てもらうため、できるだけ季候の良い時期に設定したいと考えた。

体調を整え、子育て交流会開始時刻に遅れずに来てもらうことは、乳児期の子どもとその親にとってたやすいことではない。当日にそのことがかなわない状況となることも想定できる。3 組の親子を招くことにしたのは、その内 1 組が当日来て頂けない事情になったとしても、他 2 組で子育て交流会を開催できると考えたからである。

1 回目の子育て交流会は C さん、D さん、E さん親子を招いた。C さん、E さん親子は光華こどもひろばに半年間参加を続けており、その過程で c 児、e 児がそれぞれによく遊び、おしゃべりをするようになっていく。D さんは 8 ヶ月の d 児を連れて子ども達が集まる場を求めて参加し始めたばかりであり、光華こどもひろばへの期待をもっていることが感じられた。C さん、D さん、E さんともに、授業で学生に話して頂きたいとお願いしたところ、快諾が得られたので、直前の光華こどもひろば来会の際に依頼書をお渡しした。3 人には「自己紹介とお子様紹介」「出産の日を迎えるまで」「生まれてすぐ感じたこと」「子育ての日々」「楽しいとき」「しんどいと感じるとき」「助け手の存在」の内容で話して頂きたいと事前に伝えていた。

(2) 2 回目の子育て交流会開催への手続き

2 回目は 2017 年 6 月 26 日(月)3 講時「障害児保育 a」(受講生 33 人)、4 講時「障害児保育 b」(受講生 36 人)の授業に C さん、D さん、F さん親子を招き、履修生と交流した。「この頃のお気に入り」「赤ちゃんの時と比べて現在の子育ては」「子どもに今してあげたいこと」「お母さんが今したいこと」「現在のお子さんの好きな遊び、お気に入り」「好きな食べ物」などのお話を聞いた。C さん、D さんは 1 回目にも参加してくださったので、7 ヶ月経ってそれぞれに c 児は満 2 歳に、d 児は 1 歳 3 か月になっていた。成長した姿やそれに伴って保護者の子育てについての感じ方の変化が聞けるのではないかと考えた。また光華こどもひろばに続けて参加している F さんは、C さん、D さんとは異なり 2 歳 2 ヶ月の f 児とともに年の離れた姉

二人も育てている。上の姉と同年齢の履修学生にお話ししていただく機会を作りたいと考えた。3人には「この頃のお気に入り」「赤ちゃんの時と比べて現在の子育ては」「子どもに今してあげたいこと」「お母さんが今したいこと」の内容で話して頂きたいと事前に伝えていた。

3. 子育て交流会の開催

2回の開催は表1のとおりである。

表1) 子育て交流会の実施

	子育て交流会 の日時	連関科目	参加親子		
①	2016/11/14	1 年次	C さん	D さん	E さん
	1 講時 / 2 講時	「乳児保育 a」 「乳児保育 b」	c 児 (1 歳 5 ヶ月男児)	d 児 (8 ヶ月男児)	e 児 (1 歳 10 ヶ月女児)
②	2017/6/26	2 年次	C さん	D さん	F さん
	3 講時 / 4 講時	「障害児保育 a」 「障害児保育 b」	c 児 (2 歳男児)	d 児 (1 歳 3 ヶ月男児)	f 児 (2 歳 2 ヶ月女児)

(1) 1 回目 (2016 年 11 月 14 日) の子育て交流会の概要

保育実習室内でじゅうたんの上に乳児用のおもちゃを置き、遊ぶ子どもを見ながら懇談できるようにした。c 児と e 児はおもちゃを次々と手にして遊び出す。D さんは膝の上に 8 ヶ月の d 児を抱いていた。E さんは e 児を見守りながら、「ママ!」と呼ばれるたびに「はい」と応えてから話を続けられた。途中 C さんはケープを掛けて授乳をし、寝かしつける場面もあった。落ち着いた中で交流会ができた。

妊娠がわかったときの驚きと喜び、お腹の中の子に名前を付けて呼びかけて過ごした日々、検診の度に満たされた思いになったこと、逆に、検診で少し心配なことを言われて悩み、夫婦で真剣に話し合ったことなど、出産の日を迎えるまでの心情を話された。生まれ出る瞬間の念じるような思いと、「やっと会えた」という安堵とを話され、学生はのめり込むように聞いていた。子育ての日々の生活はすっかり子ども中心に変わってしまい、子どもの笑顔が元気の源であることを話された。「出来ることが少しずつ増えていくこと」「親の懷に飛び込んできてくれること」が子育ての喜びだが、「母親なんだからがんばらなくちゃ」と思って「一人でするしかない」と思ってしまふときに子育ての辛さを感じておられることも伺った。そんな中、光華こどもひろばのことを知り、来会されたとのことである。同じ年齢の子どもと意識し合って遊んでいる姿に、「こ

んな風に子どもって育つんだ」と思えること、また、お母さん同士の交流の場になっていることを話された。

後日光華こどもひろばに参加した学生は、c 児、d 児、e 児との再会を喜び、声をかけ、C、D、E さんとも話をしていた。

(2) 2 回目 (2017 年 6 月 26 日) の子育て交流会の概要

学生は丸くなって座り、来会を待っていた。1 歳 3 ヶ月になった d 児が歩いて入室すると、学生らは「かわいい」と声をあげ、その動きを見守っていた。c 児はドアのところで止まり、C さんが先に入室した後もしばらく様子を見ていた。2 歳 2 ヶ月の f 児は今回初めての子育て交流会参加であるが入室後から機嫌よくぴょんぴょん跳んで踊っているようだった。C さん、D さん、F さんからお子さんの紹介をしてもらい、3 人が同学年であることがわかると、学生は声をあげて驚いていた。d 児と f 児の 11 ヶ月の月齢差による姿を目の当たりにしたのである。ドアのところから c 児は母親を呼び、迎えに来てもらってやっと入室し、おもちゃで遊び始めた。

子どもが育つにつれ、子どものものが多くなり、大事なものは届かないよう上へ上へと場所が移っていくこと、スイッチに触れるので油断ならないことなど、子育て中の家の様子を聞くことができた。その間、f 児はマイクを握って声を響かせることを繰り返し試し、c 児と f 児がおもちゃの取り合いをするという場面もあった。自分だけの時間がなくなって、夜ぐっすり眠れない子育ての日々ののぞみは、友達とお話ししながらお食事をしたいことだと伺った。一方、「家族で過ごす時間を大切にしたい」と今を大切に過ごそうとしていることもわかった。

学生から、「お子さんのお名前の由来は」という質問があり、それぞれの親御さんの、子どもの名前に託した願いをお聞きすることができた。最後に学生へ、「幼稚園、保育園は子どもの世界を広げるところで、先生や友達と一緒に居るのは楽しいことなんだと導く先生になってほしい」とのお勧めを頂いた。

Ⅳ. 結果

1. 1 回目の子育て交流会お礼カードの記載内容からみる学生の学び

子育て交流会の後、学生は課題として3人それぞれへ4×9cmのスペースに感想を書いた。翌週の授業で切り貼りにして3人それぞれへのお礼カードとして作成、光華こどもひろば来会時にお渡しした。1回目の子育て交流会、2回目の子育て交流会に続けて参加して下さったCさん、Dさんに向けて学生が記述したお礼カードに着目することにする。

1回目後の学生の記述から、学生の学びは①出産に関わる理解、②子育ての現実、という学生には未知であった内容、③子ども理解を深めたこと、④育児の支援の必要性について考えたこと、⑤育てる者の気持ちの理解、⑥保育者として自らのあり方の計6項目に分けられると考えられる。下記に項目毎に記す。

(1) 出産に関わる理解

学生にとって出産は未知の出来事である。出産に関わる話を聞くことは初めてという学生も多く、興味を向けて聞いたようである。表2のように6つの記述があった。子育て交流会参加の3人は直近の1～2年間に出産を経験しており、その記憶やその間の気持ちを鮮明にお話しして下さった。身体の変化と不安、母胎の中に胎児が居ること、出産の痛みを、学生は生々しく聞くことができた。それは将来経験するであろうこととして聞き、さらには子どもが生まれるということの尊さを自らの身に引き寄せながら聞いたと察せられた。

表2)「出産に関わる理解」に関する記載内容

分類項目	お礼カードの記述
(1) 出産に関わる理解	出産が近づくにつれ不安になるんだ
	出産するときの大変さがわかりました
	相当な痛みだということがわかりました
	妊娠中って大変
	胎動を感じるたびに子どもがいることを実感し親になることについて考えるのかな
	出産にかかった時間や生まれた時の身長体重を覚えているのだ

(2) 子育ての現実

出産してすぐに子育ての日々が始まる。表3にあげた9つの記述は、子育てというのは常に子どもと共にあり対応しなければならない緊張感、身体的な疲労を伴うということである。子どもは守ってやらなければならない存在であり、子どもも全身の力で親に寄り頼む。子どもと共にある生活というのはそのような現実にはさらされている。このことを学生が想像することは簡単ではないのだが、子育て真っ最中の方々の語りを聞くことによって驚きと共に理解を進めることができたと思う。

表3)「子育ての現実」に関する記載内容

分類項目	お礼カードの記述
(2) 子育ての現実	気分転換もできなくなるのはすごく大変だ
	当たり前だったことが、子どもが生まれると当たり前でなくなる
	どんな時も目が離せずストレスが溜まってしまうことがある
	自分の時間が作れないということは思った以上に大変
	何で泣いているのかわからなくて辛いことがある
	睡眠を十分とれず大変
	風邪をどちらもひいたときとても大変
	家事との両立が大変
	授乳用の布をみて、こんな便利なものがあるんだと感心した

(3) 子ども理解を深めたこと

このあと2回目の子育て交流会にも続けて参加して下さることになるCさん、Dさんへの記述の変化を見たいので、Cさん、Dさんそれぞれへの記述を表4にあげる。この日、1歳5ヶ月のc児は母親の見守りを受けて室内を行き来し遊んでいた。8ヶ月のd児は母親に抱かれた状態から一人座り、はいはいでおもちゃの所へ行くというように、少しずつ行動を変化させていた。学生は保護者の話を聞きながら、c児、d児の遊ぶ様子、動き、表情を受容的なまなざしで見ていることがわかる。学生もc児、d児に愛しさを抱き、それぞれの発達段階への理解を進めたと考えられる。

表 4)「子ども理解」に関わる記載内容

分類項目	Cさんへのお礼カードの記述	Dさんへのお礼カードの記述
(3) 子ども理解	人の間をくぐり抜けて歩いてとても元気	お座りが上手にできてかわいかった
	活発、元気でかわいい男の子	おもちゃに向かってはいしている姿が印象的
	走り回ったり、隅っこにいたり、寝ている姿もかわいいなあ	子どもの笑顔でうれしくなって子どもの力ってすごい
	おいしそうに食べていた	1歳になるまでの成長の仕方がよくわかりました
		表情豊かでとてもかわいい 8ヶ月の赤ちゃんってこんなことができるんだ、気になるんだ じーっと見つめたりして、何を考えているのだろうと思いました

(4) 育児の支援の必要性について考えたこと

Cさんに対しては「お手伝いをしたい」と漠然とした支援の気持ちを向けているのに対して、Dさんへはベビーカーを使っでの移動に関して支援が必要であり何か力になれる場面ではしたいと、支援の具体例の記述が見られる。表5の通りである。乳児であるd児を連れての外出はベビーカーを使うことが多く、不便を感じることがあるとのDさんの話を受けてこのように感じているのだと考える。聞いたことによって具体的な支援の必要を知ることができた。

表 5)「育児の支援の必要性」に関わる記載内容

分類項目	Cさんへのお礼カードの記述	Dさんへのお礼カードの記述
(4) 育児の支援の必要性	親子を見たら声をかけたり、お手伝いできることをしたい	ベビーカーを持って階段を下りるのが大変と聞いて、手助けができる人になりたいと思った
	私たちでもお手伝いできそうだと感じた	ベビーカーを使っでの移動が大変だと聞くまで、このことについて考えたことがなかった
		困っているお母さんがいたら助けてあげたいと思いました お父さんの協力、やさしさがあって今笑顔で居られるんだ

(5) 育てる者の気持ちの理解

子どもを育てる中で、親は身体的なしんどさを感じると共に、幼い我が子の意思をくみ取ることの困難にも遭遇する。それでも子どものためにと工夫を重ねて接していく必要があり、そんな子育ての苦労は子どもの笑顔でいやされることも知った。表6の通りである。我が子の成長を願う親の気持ちを知ることができた。

表 6)「育てる者の気持ちの理解」に関わる記載内容

分類項目	お礼カードの記述
(5) 育てる者の気持ちの理解	子どものために工夫をして考えている
	きのうできなかったことが今日できたその喜びを感じられる
	無事に生まれてきてほしいと願う気持ちはどの母親も思うことなんだ
	成長していく姿を見るとしんどいことも忘れられるのがわかる気がした
	お母さんは子どものしぐさで笑顔になったり元気になる
	笑顔を見たらしょうがないと思えるとおっしゃっていたのが印象的
	いろんな思いがあって光華こどもひろばに來ているんだとあらためて気づいた

(6) 保育者として自らのあり方

目指す保育者像については表7のように4つの記述が見られた。子育て中の親は心身の負担を感じていることがわかり、そこに寄り添えるようになりたいと考えている記述があった。また、将来出会う子ども一人一人の個性の尊重を目指す記述もあった。子育て交流会で、親が子育ての苦労を話しながらもわが子の個性をユニークなものとして紹介したことを受けての回答だと考えられる。また、保育者になるという意味を固くした記述も見られた。

表 7)「保育者として自らのあり方」に関わる記載内容

分類項目	お礼カードの記述
(6) 保育者として自らのあり方	保育者になった時、お母さんの気持ちにも寄り添えるようになりたい
	一人一人の個性を伸ばしていけるような保育士になりたい
	保育士になって支えたいという気持ちが大きくなりました
	日々成長する姿を喜び楽しんでいける保育士になりたいと思いました

2. 2 回目の子育て交流会お礼カードの記載内容からみる学生の学び

2 回目後の記述から、学生の学びは①子どもの成長、②子どもの気持ちの捉え方、③子育ての工夫、④成長に伴って変化する親の悩み、⑤保育者としての自らのあり方の計 5 項目に分けられると考えられる。各分類項目の記載内容をあげて、考察していく。

(1) 子どもの成長

1 回目の子育て交流会参加時との差異を、現在の子どもの実際の姿から知ることができた。表 8 に C さん、D さんへの記述を表す。満 2 歳の c 児が食べる場面や遊びの場面で意思を表しているお話を聞き、学生は納得して理解したことがわかる。前回には乳児であった d 児が今回は母親の顔を見ながら自由に行き来する姿があり、学生は子どもの成長を喜び捉えていることが考えられる。

表 8) 「子どもの成長」に関する記載内容

分類項目	C さんへのお礼カードの記述	D さんへのお礼カードの記述
(1) 子どもの成長	フォークを持って逆の手で手づかみで食べるというエピソードがとてもかわいらしいと思いました	前は座って遊んでいたけれど今回は歩いて自分でおもちゃを取りに行っていたので半年の成長はすごいと思った
	満 2 歳児の好きな食べ物、興味、関心があるもの、健康状態などを聞くことができ、成長の様子を学ぶことができました	3 月生まれということで、同じ年だけれど成長の差があることがわかりました。
	食べる真似をしたり、遊びに変化が見られ成長を感じた	てちてちと歩く姿がとても可愛かったです
		鏡を見たり、お母さんの顔を見てとても笑っていた
		意味のある笑いが増えていてとても可愛かった

(2) 子どもの気持ちの捉え方

学生は、前回より 7 ヶ月経った c 児、d 児の成長を目の当たりにした。それぞれの親御さんが我が子と気持ちを合わせ、子どもの興味に添い、興味あることにはより経験を広げてあげようとしていることを知るこ

とができた。表 9 のとおりである。毎日見守っているからこそ子どもの思いを読みとれるようになるということも感じとることができた。この日 c 児は、入室に抵抗があったのだがその気持ち自体も認め、時間をかけ無理なく入室へと c 児が気持ちを変えることができた。その経過から学生は子どもの気持ちを捉えようと努めることの大切さを学んだと考えられる。

表 9) 「子どもの気持ちの捉え方」に関する記載内容

分類項目	C さんへのお礼カードの記述	D さんへのお礼カードの記述
(2) 子どもの気持ちの捉え方	興味を広げてあげたといとおしゃったことが印象的	なぜ泣いたりするか分かるようになってきたのがすごい
	公園でブランコ、滑り台に興味を持っていて、好奇心を大事にしてあげるといいう話が印象的	共感しあえることが嬉しい楽しいというお話を聞いて、探りながら子どもとの関係が深まるんだと感じました
	乗り物が好きで、誕生日に空港に連れて行ったエピソードがすごくステキだと思った	踏切を見ると「ああ」といって電車が好きなことがわかりました
	制限しすぎず好奇心を大切にしたいと言っておられたのが印象的	バナナを「ば」と言っ、好きなことを伝えることがわかりました
	今日ははずかしいのか、最初なかなか入ってこれず泣いてしまったけれど、入ってからは楽しそうに遊んでいたの良かったです	何を考えているのか分かるようになってきたというお話を聞いて、毎日見守っているからわかるようになるのだろうと思った

(3) 子育ての工夫

先に挙げたように c 児、d 児ともに、好きなことを見つ、そのことを親に伝えるようになっている。そこで親御さんはその意味を読みとろうとしている。子どもの興味にまず添い、一緒に楽しもうとすることで具体的に工夫点を得てきたのだろうと考える。

表 10) 「子育ての工夫」に関する記載内容

分類項目	C さんへのお礼カードの記述	D さんへのお礼カードの記述
(3) 子育ての工夫	ご飯は大人とほぼ同じものだが味は薄味にしていると聞き、工夫が要るのだと思った	電車を見に連れて行くなど、子どもの興味を広げているのが良いと思いました
	好奇心を制限せず、危険からは守って興味を広げているのがすごいと思った	

(4) 成長に伴って変化する親の悩み

抱いて移動していた乳児の頃と異なり、自分の意のままに行ってしまうゆえ、目を離せず、危険回避への配慮が必要となる。また自分の意思を表現するようになり、叶えられない場合も生じ、親子の間で葛藤が起る。親にとっては育児の負担が大きくなったと感じる頃である。それは我が子の主張に応えるべく自らの価値観を揺るがされることによる負担であろう。表 11 のように成長の印と解釈することによってこの変化を楽しむこともできることがわかる。子どもの成長に伴い、親御さんの悩みの内容が変化していくということは学生にとっては初めて聞くことであり、保護者理解を深めたと考える。

表 11) 「成長に伴って変化する親の悩み」に関する記載内容

分類項目	お礼カードの記述
(4) 成長に伴って変化する親の悩み	大きくなるとできることが増え、理解できることも増えて嬉しいけれど、大変なことも同じようにあることを学びました
	自分の主張をするようになり、お母さんの思い通りにならなくなってきたが、強制的に辞めさせないように心がけているということがすごいと思った
	思い切り動かないと夜は寝てくれないという話が印象に残りました
	成長するにつれて悩みが変わったり、危険なことが増えるということを知ることができた
	一つの悩みが解決しても、次から次にどうしようと思ってしまうお話に、子育ての大変さを感じました
	以前と今とを比べると、大変なことが変わっていて、それを実感するとき楽しいと聞き、変化を楽しむことができるのだと知りました
	お母さん自身の自由な時間がとれない
	危険が増え、荷物を上に置くなど配慮があるとわかりました

(5) 保育者としての自らのあり方

成長に伴い、子ども自身がやってみたいと思うことが増え、行動範囲が広がる。子どもの思いを尊重しつつ、安全への配慮が保育者の仕事であることを確認したようである。また親御さんからのお勧めの言葉の中に、保育の場が子どもの生きる社会として貴重であることを知らされ、自らがそこに関わる保育者になるという責務に気づく機会となった。

表 12) 「保育者としての自らのあり方」に関する記載内容

分類項目	お礼カードの記述
(5) 保育者としての自らのあり方	大きくなってできることが増えたが、危険性が増したというお話を聞いて、保育士となったら危険には充分気を付けたいと感じました
	行動範囲やできることが多くなり、保育者となったら安全面に気をつけなければと思いました。
	幼稚園、保育園が子どもにとって初めて世界が広がる場所とおっしゃって、自分が目指す職業が本当に重要であると改めて感じました

3. 感想シートからみる子育て交流会の意義

1 回目子育て交流会、2 回目子育て交流会に続けて参加された C さん、D さんが感想シートに書いて下さった内容、また筆者に直接お話し下さった内容を取り上げることとする。

表 13 は C さんの記述内容である。

表 13) C さんの感想シート記述内容

感想シートの記述	C さんの感想
1 回目子育て交流会	・これまでの子育てを振り返る良い機会になった ・一生懸命聞いてもらえて嬉しかった
2 回目子育て交流会	・皆さんの前で話すことで、子育てについて客観的に考え、見つめなおすことができ、ありがたい機会をいただいた

さらに 1 回目子育て交流会後、C さんからは「子育てに夢中の日々は、過ぎた苦勞を忘れてしまうけれど、今回の交流会でお話しする機会を頂いたので、気持ちを整理することができました」とのお話を伺うことができた。子育ては毎日が懸命であり、まさに今が精一杯という日を重ねていく。子育て交流会で語ることに

よって、出産時やこれまでの子育ての様子を振り返る機会を得たとのことである。それは、今はもちろん、これまでも悩みながらも一生懸命に育ててきたという自己の振り返りであろう。そしてその話を学生に聞いてもらったのである。先に生きる者としての経験を学生が受け止めてくれたという手応えを感じたのであろう。

表 14 は D さんの記述内容である。

表 14) D さんの感想シート記述内容

感想シートの記述	D さんの感想
1 回目子育て交流会	<ul style="list-style-type: none"> ・改めて出産前の気持ち、出産時のこと、出産後のことを思い出すことができた ・一呼吸おいて今の状況を見つめ直せた ・光華こどもひろばで学生さんから声をかけてもらって一緒に遊んでもらえて嬉しい
2 回目子育て交流会	<ul style="list-style-type: none"> ・あらためてこの半年間を振り返ることができた ・光華こどもひろばで会うことのできる学生さんたちとこんな風に交流できたことはとてもうれしい

また 1 回目子育て交流会後、D さんからは「きちんと自分の話を聞いてもらうのは久しぶりの機会でした」との感想を聞くことができた。8 ヶ月という幼い d 児を連れて光華こどもひろばに参加しはじめた D さんにとっては、光華こどもひろばがまさに出産後初めて参加する社会であったと考えられる。学生から声をかけてもらって一緒に遊んでもらえることへの喜びを記し、一呼吸おいて出産からこれまでのこと、今の状況を振り返る機会となった。子育て真っ最中は他者に自分の話をきちんと聞いてもらうという機会もなく、子どもの対応に追われる。子育て交流会は自分が経験した話を熱心に聞いてもらえるひとときとなった。

C さん、D さん共に、たくさんの学生の前で話すことへの緊張感や遠慮は感じられず、子育てで経験したこと、考えたこと、思ったことを等身大で語って下さった。それゆえ、語ることによってありのままを受け入れてもらえたという喜びと、懸命に子育てをする自分に対する肯定感を得ることができたと考える。

V. 考察

学生は子どもが自由に遊ぶ様子を見ながら話を聞き子ども理解と保護者理解を深めた。子育て交流会を通した学びをお礼カードに記したのであるが、それによって親御さんは語りを受け入れてもらえたことを確かめることができた。1 年次後期、2 年次前期の 2 回行った子育て交流会について、学生にとっての意義と、子育て支援の視点からの意義をまとめる。

1. 学生にとっての子育て交流会の意義

乳児期の子どもは、人見知りをする場面がある一方、一番安心できる大人に思いをぶつけることもある。学生は光華こどもひろばでの保育を経験し、このような乳児に寄り添うあり方を学びつつある。その経験を基として、子育て交流会で子育てについての苦労や葛藤を聞くことができた。聞きながら、この場で遊んでいる子どもの姿を見て、家での様子に思いをはせることとなった。

1 回目の子育て交流会において、学生はまず出産という一大事を通して生まれてきた生命の尊さを確認することができた。学生によっては自分の生まれたときの話を親から聞くことがあったかもしれない。ここでは光華こどもひろばに参加する保護者による語りであり、出産を経ってから 1 年未満、または 2 年未満のため記憶が鮮明で、その語りも臨場感に溢れていた。それゆえ、学生は引き込まれるように聞くことができた。そして、出産後向き合うことになった子育ての現実の話をふまえて、子ども理解と子育て支援の必要性を考えることができた。

その 7 ヶ月後に、2 回目の子育て交流会を開催した。それぞれの子どもは大きくなっており、動きや発語、遊び方からも成長を見ることができた。それに伴い、保護者は子どもの思いを捉えやすくなっている。子どもが自分でできるような工夫を考えながら試みていることもわかる。一方、自我が育ち、子どもの気持ちを尊重しながら子育てすることの困難さにも遭遇する。そこで、親子で一日を過ごすだけでなく、保護者同士の情報交換と、子ども同士の交流の場が必要であることも知ることができた。

学生にとって 2 回の子育て交流会を経験することの意義をまとめる。一つ目は、出産から現在の子育てに

至る話を連続して聞くことによって、親になるということ
で生じる心身と生活の変化を理解したことであろう。二つ目は2回連続参加の親子がいたことによって
7ヶ月という時期を経た子どもの成長とそれに伴う子育ての手応えの変化を理解したことである。三つ目は
子どもを育てる親の負担への理解である。四つ目は子育て支援の必要性への気づきである。五つ目は、自らの
目指す保育者像を描く機会となったことである。充分な理解には到らないであろうが、これら5点について
問題意識を持つことによって子育て支援への配慮を含んだ保育を行う資質が育まれたと考える。

2. 子育て交流会開催による子育て支援

子育て交流会によって参加親子に及ぼされたことを
まとめる。子育て中の保護者は子どもの成長を願いながら模索を重ね、心身のエネルギーを子どもに向けて
過ごしている。山辺は子どもを世話することの魅力として無邪気さと責任の意識をあげ、これらが重なり合う
時に魅力が実感を伴うと述べている。そして、「自分は子育ての責任をある程度果たすことができるという経験に
立脚した自信」を得たときはじめて前向きな姿勢になれるとも言う³⁾。

子育て交流会では出産からこれまでの育児について、体験したこと、その中で考えたことを振り返って
学生に向けて話して下さった。学生の授業という公共性のある場で等身大の語りをされた。それを学生に懸命に
聞いてもらえ、少しはお役に立てたという手応えを得ることができた。先の山辺の記述に照らすと、語りを受け
入れてもらうことによって子育ての責任をある程度果たすことができている自分のありようを確認することができ
たと言える。これまでの子育てについて公の場で語ることによって経験に立脚した自信、つまり自らの今後への
励みを得たのである。

3. まとめ

上記のように子育て交流会の開催は学生にとって、
そして子育て支援にとって意義が見いだされた。

学生は光華こどもひろばへの保育参加を重ね、乳児
期の子どもと関わる時に必要な感性を得ていった。子育て交流会は子どもが自由に遊び、子どものあり様を
そのまま受け入れる場であった。そのような場で親御さんは学生に語り、学生はその語りを貴重な話と

して聞いた。つまり相互に尊重しあう時間であった。
このような時を経て親としての肯定感を得ることができた。

このように光華こどもひろばと授業との有機的な往
還を機軸として子育て交流会の開催が意義あるものとなった。

注

- 注1) 拙稿「子育て交流会を通した学生の学び」『京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要』第55号 pp.245-252 で、授業および光華こどもひろばと子育て交流会の有機的な展開案を提案した。
- 注2) 入江礼子他編『子ども・保護者・学生が共に育つ保育・子育て支援演習』の中で、授業との連携について2校の事例を挙げて紹介している。
- 注3) 寺田清美『赤ちゃんとふれあおう 2. 赤ちゃんとふれあい授業』の中で小学生と赤ちゃんと交流授業の様子が写真入りで描かれている。

引用文献

- 1) 厚生労働省編『保育所保育指針〈平成29年告示〉』第4章
- 2) 古田康生「大学を核とした子育て支援事業への参加が学生相互の気づきに与える影響」『環太平洋大学研究紀要』5巻 .2012.pp.135-142.p.139
- 3) 山辺恵理子「子育て中の母親からみた『子育て支援』」『子どもの文化』43巻9号 .2011.pp.12-17.p.13

付記

- ・本稿はその一部を、日本保育学会第71回大会(2018)において和田幸子「子育て交流会を通して得られたもの～学生の学びと子育て支援の往還に着目して～」として発表している。
- ・子育て交流会は、平成28年度および29年度右京区まちづくり支援制度の支援を受けて実施した。

